

◆近代歌人の面影

吉川宏志

Hiroshi Yoshikawa

長塚 節 其一

見えるものから見えないものへ

長塚節は、藤沢周平の小説「白き瓶」にその生涯を描かれたことでも有名な歌人である。繊細で鋭敏な感覚をもつ彼の歌は、多くの人を魅了してきた。

節は、明治十二（一八七九）年、茨城県岡田郡国生村（現・常総市）で生まれた。鬼怒川のほとりにある静かな農村であった。長塚家は当時、広大な山林や田畑をもつ富裕な農家であり、長男である節は大切に育てられたようである。幼いころ身体が弱かった節は読書を好み、やがて和歌にも関心をもつようになった。

精神的な衰弱のため、節は茨城県尋常中学校を十八歳で退学する。療養を兼ねて温泉地を旅するようになった節は、短歌を数多く作るようになる。そして、「新聞『日本』」に連載されていた正岡子規の「歌よみに与ふる書」に出合うのである。節はそれを読み、「いかに

も愉快でたまらない」（随筆「竹の里人」）と感銘を受けた。子規の歌にも興味を持ち、真似て歌を作るようになる。明治三十三（一九〇〇）年には、「日本」の第二回の短歌募集に応募し、二首が入選したのであった。

同年三月、節は上京して正岡子規の家（根岸庵）を訪問する。そこで念願の入門を果たすのである。このとき子規は線香に火を付け、燃え尽きる間に、その場の实景を歌に詠めと命じる。節は子規の教えを忠実に守り、根岸庵の様子を、見たままに十首の歌にしたのだった。

茨の木の赤き芽をふく垣の上にしちひさき
虫の出でて飛ぶ見ゆ

ガラス戸のそとに飼ひ置く鳥の影のガラ
ス戸透きて畳にうつりぬ



子規の歌をよく学び、見たものを絵画的に配置する技法を身に付けていたからこそ、短時間のうちにこうした歌が作れたのであろう。一首目では「赤き芽」と鮮やかな色彩を出し、「ちひさき虫」の動きに焦点を当てる。二首目は庭にいる鳥の影が、ガラス戸をとおして部屋の中に映っているという描写がじつに細やかである。当時はまだ珍しかったガラス戸を見た驚きも、この歌の背後にはあったのかもしれない。

子規はこの十首をそのまま『日本』に掲載した。節にとつては望外の喜びであっただろう。そして、自分が見たものをそのまま詠めば短歌になるのだ、という強い自信をもったはずである。

しかし子規の病状は急激に悪化してゆく。子規は節に深い信頼感を抱き、文学だけでなく農村の発展のためにも尽力しなければならぬ、という内容の書簡を送っている。そこには人間的にもっと大きく成長してほしいという期待があったのだろう。明治三十五（一九〇二年）九月、子規は激痛に苦しみながら病死する。

かくの如^し櫛^の枝は手向くべくなりにし君
は悲しきろかも

子規の墓を詣でた節はこんな歌を作っている。いつかは子規の死に遭うことは覚悟していただろう。しかし、墓前に櫛の枝を供えていることがまだ信じられない——そんな気持ちにじんできている歌である。

子規の文学的遺産を、後続世代はどのように引き継いでいくか。節たちにとつてそれは喫緊の課題になっていく。

節がまず取り組んだのは、今まで短歌に詠まれていないような植物を歌に詠みこむことであった。古典和歌の世界では、歌に詠まれる植物は、桜・梅・山吹・橘・カキツバタなど、種類は限定されている。しかし、明治時代になると『有用植物図説』（明治二十四年）を皮切りとして植物図鑑の類が刊行されるようになり、身近にある野草に関心をもつ人々が現れるようになっていた。節もその中の一人であったのだ。節はこんなことを書いている。

「全体歌人などは動植物の智識などがあんまり無さすぎるのだ、少しの心掛けやうによつて、路傍にいくら程やさしい面白い草があるか知れんといふこともわかる、そんなもので作るとしたならば仮令それが非常に上乘な作でないにしても変つたものである。自己の歌ふ所の区域が拡大されるのだ。」（明治三十七年「竹の里人選歌につき」）

これまで歌われてこなかった植物を歌うことで、新しい「自己」も表現できるのではないか。そんな期待があったのである。このころ、節は次のような歌を作り、子規の門人たちが創刊した『馬酔木』に発表している。

鋸の歯なす諸葉の真中ゆもつら抽きたて
るたむばほの花



茨城県常総市石下の長塚節生家。

かはづなく水田のさきの樹群にししらし
ら見ゆる英蓬の花

筑波嶺のみちの邂逅にやまびとゆ聞きて
知りたるやまぶきささうの花

一首目はタンポポの姿を言葉で精密に描こうとした歌である。ぎざぎざの葉の中心から茎が伸び、花が咲いている様子を、短い言葉で苦心して表現しようとしている。二首目は「英蓬の花」という当時では珍しい素材を詠み込んでいるところに、作者の工夫があった。三首目は「やまびと」に草の名前を聞いて植物の知識を広げようとしていたことがよくわかる歌である。

こうした歌の背景には、子規の作風を自分なりの形で継承していきたいという節の意志があったのである。新しい素材に取り組むこと、見たままに描写すること。節の歌はまさに子規の方法の延長線上にある。さらに言えば、単調な風景と思われていた故郷の農村を新しい目で見つめ直し、身近なところにある美を発見したいという願望も込められていた。それは、農村の発展のために尽力せよという子規の遺言に込める試みでもあったのだ。

しかし、節の試行は、子規の先輩弟子であった伊藤左千夫によって厳しく批判されることになる。植物の様子を説明することに終始している節の歌は、「人事」がおろそかにされており、「面白味」がないと左千夫は

断じたのである。歌に、人間の感情があらわれていないことが、左千夫には不満だったのだ。

左千夫の非難にはライバルに対する嫉妬心も含まれていたようだが、当たっているところはあるだろう。節の歌には細密画のようなおもしろさがあり、タンポポの歌などは巧緻な表現に感心させられる。けれども、目に見えるものをそのままぞっているだけで、感情の深さに欠けるところはあるのではないか。晩年の子規の歌には「瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり」など、細かいところを詠みつつ、しみじみと心に沁みるような伸びやかな韻律があった。そのような奥行きのある深さは、こうした植物の歌から感じることはできない。しかし節は「まあじつとして見て居て貰ひたい。(中略)飽きるまではやるのである。」(明治三十八年「歌譚抄を讀みて」と述べ、自分の信念を貫いていくことを決意するのである。

明治三十八(一九〇五)年から、節はさまざまな土地を旅するようになる。そして、その土地の風景や自然を丁寧に詠んだ歌を作りはじめる。

水泡よる汀に赤き蓼の穂に去りて又来るお
はぐろ蜻蛉 (諏訪)

鯨江の繩手をくれば田のくろの菽のなかに
も曼珠沙華赤し (大垣)

近江路の秋田はろかに見はるかす彦根が城
に雲の脚垂れぬ (彦根)



茨城県尋常中学校(のちの水戸中学校)時代の節、前列左から3人目。
明治26(1893)年ごろ。

それまでは静止している物を見つめた歌が多かったのだが、旅の中で詠まれていたためか、場面に動きが生まれている感じがする。「おはぐる蜻蛉」の動きや、道を歩いてきて曼珠沙華に出遭ったときの鮮明な印象が歌われることで、いきいきとした情感が伝わってくるのだ。また、歌に遠近法のような構図が用いられていることにも注目したい。特に三首目は風景画のように広々とした世界が見えてくる歌である。節の歌には小さいところにこだわりすぎる生硬さがあったが、ゆったりとして柔らかな調子が現れているのである。

そして明治四十(一九〇七)年の秋に決定的な転機が訪れる。「初秋の歌」十二首の誕生である。

小夜深にさきて散るとふ稗草のひそやか
にして秋さりぬらむ

馬追虫の髭のそよりに来る秋はまなこを
閉ぢて想ひ見るべし

おしなべて木草に露を置かむとぞ夜空は
近く相迫り見ゆ

節はこれまで、子規に教えられたとおり、目に見えるものを写實的に描くことに力を注いできた。しかしこのとき節は、「稗草」や「馬追虫」などの目に見えるものの背後に存在する「秋」つまり「時間そのもの」を捉えようとしていたのである。「まなこを閉ぢて想ひ見るべし」とあるように、目を閉じて、見えないも

のを見ようとしていたのだ。

もちろん高度な表現技術がなければ、こうした歌を生み出すことは不可能である。「稗草のひそやかにして」「馬追虫の髭のそよりに来る秋」という表現には、「万葉集」で多く使われている序詞の技法が用いられていた。「ひえくさ」という音の響きが、秋の夜の「ひそやか」な様子を伝えている。ウマオイの髭の「そよ」と揺れる感じが、しのびやかな秋の訪れを視覚的にイメージさせる。目に見えない時間の流れが、言葉によって美しい形を与えられて、一首の中で静かに息づいているのだ。古典を熟読し、近代に蘇らせることで、繊細な時間感覚が短歌で表現できるようになったのである。「初秋の歌」の表現は、斎藤茂吉を初めとして多くの歌人に影響を与えていく。

「初秋の歌」は節にとって前期の到達点というべき作品であった。しかし到達点とはそれ以上の歌ができなくなってしまう、ということも意味する。当時の島木赤彦宛ての書簡によれば、節は短歌に行き詰まりを感じていたようである。彼はやがて二年あまりの作歌中断期に入ってしまう。短歌への関心が薄れた彼は、小説執筆のほうに情熱を注ぐようになる。夏目漱石の推薦で、節は東京朝日新聞に小説を連載する機会を与えられる。のちに農文学の名作と呼ばれるようになる『土』の執筆はこうして開始されたのであった。

(よしかわ・ひろし)「塔」(選者)



伊藤左千夫(左)と長塚節。
千葉県神崎神社境内にて、明治38(1905)年5月撮影。

長塚節作品抄 (一)

歌人の竹の里人おとなへばやまひの牀に絵をかきてあり「長塚節全集」明治三十三年

竹やぶにたまたま生ふるたらの木の刺ある木の芽折りて贈りぬ

障子あけて晴をよろこぶ家の中にすずめ来りぬひとつ来りぬ

荒小田をかへでの枝に赤芽吹き春たけぬれど二人こもり居 明治三十五年

千葉の野を越えてしくれば蜀黍の高穂の上に海あらはれぬ

春雨に濡れつつたらは折らめどもをりきと告げむ人のあらく 明治三十六年

おくて田の稲刈るころゆ夕されば筑波の山のむらさきに見ゆ

枝毎に三また成せる三椏の蓄をみれば蜂の巢の如 明治三十七年

春の田を耕し人のゆきかひに泥にまみれし鼠麴草の花

白埴の瓶によそひて活けまきはみじかく折りし山百合の花

鮭網を引き干す利根の川岸にさける紅蓼葉は紅葉せり 明治三十八年

秋の野に豆曳くあとにひきのこる莠がなかのこほろぎの声

鬼怒川の蓼かれがれのみぎには枸杞の実赤く冬さりにけり

唐鞆の雨をさびしみ鳴く庭に十もとに足らぬ黍垂れにけり

鴨跖草の花のみだれに押しつけてあまたも干せる山の真柴か

ほこりかも吹きあげたと見るまでに沖辺は闇し磯は白波 明治三十九年

薦かけて桶の深きに入れおける蛸もこほらむ寒き此夜は

南瓜の茂りがなかに抜きいでし莠そよぎて秋立ちぬらし

植草の鋸草の茂り葉のいやこまやかに渡る秋かも 明治四十年

目にも見えずわたらふ秋は栗の木なりたる毬のつばらつばらに

秋といへば譬へば繁き松の葉の細く遍く立ちわたるめり

芋の葉にこぼるる玉のこぼれこぼれ子芋は白く凝りつつあらむ

芋がらを壁に吊せば秋の日のかけり又さしこまやかに射す

夜なべすと繩縷ふ人よ鋤掛の鋤の光はさやけかるかも

はろばろに匂へる秋の草原を浪の偃ふ如霧通り来も 明治四十一年

秋草のにはへる野辺をみなそこと天つ狭霧はおり沈めたり

葉鶏頭の八尺のあけの燃ゆる時庭の夕はいや大なり

久方の天を一樹に仰ぎ見る銀杏の実ぬらし秋雨ぞふる

こほろぎのこもれる穴は雨ふらば落葉の戸もてとぎせるらしき

稲刈りて淋しく晴るる秋の野に黄菊はあまた眼をひらきたり

◆近代歌人の面影

吉川宏志

HIROSHI YOSHIIKAWA

長塚 節

其二

死の前の清澄と彷徨

明治四十三年（一九一〇）年六月から東京朝日新聞に連載された小説『土』は、長塚節の意気込みにもかかわらず、当時の読者からは評判がよくなかった。現在では農民文学の秀作として名高いが、自然描写が多く、物語の進展がゆったりとしているので、都市の読者の関心を惹くことはなかったのだろう。十一月に連載が終了したあとは、執筆の機会はなく、農業に専念する日々が続いていた。短歌も中断したままであった。しかし、その翌年に同郷の黒田てる子との婚約も決まり、節は幸福な気分だったようである。『土』は世間的には成功しなかったが、一つの世界を書き上げた充実感があったのだろう。節は三十三歳になっていた。

その年の七月、節は信州の歌人の胡桃沢勘内から、焼岳の絵葉書をもらう。そこには「乗くら岳の右の方に当りて」という言葉が書かれていた。節はその一言から、かつて信州を旅したときに見た乗鞍岳をありありと思い出した。その印象をもとに、節は「晩ほとんど眠らずに十四首の歌を作ったという。胡桃沢宛ての手紙に、「歌といふものはもはや到底出来ぬものと観念もし、又つまらぬもの」と思っていたが、作ることができたときは「やはり懐かしきもの」だった、と書かれている。節の率直な喜びがあふれている。

鳴の声透りて響く秋の空にとがりて白き乗鞍を見し

「アララギ」四卷八号（子規記念号）に掲載された「乗鞍岳を憶ふ」の中の一首である。目の前にあるものを詠むよりも、むしろ今ここにないものを歌うほうが豊かなイメージを広げることができるという、節の特徴がよくあらわれたエピソードであろう。このまま順調



に、短歌へ復帰すると思われた。

しかし、厳しい運命が節を襲う。夏以降、咽喉が痛み、咳がひどくなったので、節は上京して医師の診断を受けた。その結果、喉頭結核にかかっていることがわかったのである。それは当時、死を覚悟しなければならぬ重病であった。

生きも死にも天のまにまにと平らけく思
ひたりしは常の時なりき

往きかひのしげき街の人皆を冬木の如も
さびしらに見つ

健康なときは、人間の生死はなるようにしかならないと気楽に思っていた。しかし、自分が死病にかかってみると、とてもそんな平常心ではいられず、運命を受け入れることができずに悶え苦しむのである。そして、心配事もなさそうに街を歩いている人々を見つ、自分だけが世界から取り残されたような孤独感をもつのである。「冬木の如も」という比喻がよく効いている。

現代でも、重病にかかったことを知った人は同じような衝撃を感じるであろう。なぜ自分がこんな不幸に遭わねばならないのかという信じられない思い。考えてみれば、近代以前の医学が発達していなかったころは、病の告知の苦しみを味わう人は少なかったはずだ。危篤にならなければ死が近いことに気づかない。節のように、まだ元気で動き回れるのに死病を知ら

されるほうが、かえってショックは大きいのもかもしれない。明治時代になり医学が発達することによって、病の進行を予測することができるようになり、皮肉なことに、自らの「余命」を知るといふ精神的な苦痛が生じてきたのだ。医師により自らの死期を知らされたときの悲痛な思いを、さまざまな歌人が歌にしているが、節の歌はその嚆矢といえるものであった。

そして節は、黒田てる子との婚約も解消してしまう。しかし、てる子は節をそのまま見捨てることができず、節が留守中の病室に「心づくしの品」を届けてくれたこともあった。節は、「我は生れて三十三年はじめて婦人の情味を解したるを覚えぬ」と書いている。女性の心の優しさに触れることで、節の内部に、淡いけれども哀切な恋の思いが湧き上がってくる。それ以降、節の作る歌には透明感のある悲しみが宿るようになる。

いまにして人はすべなし鴨跖草の夕さく花
を求むるが如

つゆ草の花を思へばうなかぶし我には見え
し其の人おもほゆ

ツユクサの青く静かな花に重ねるようにして、結ばれることのなかった女性の面影を歌っている。一首目は、ツユクサが午後になると花を閉じてしまうことを踏まえた歌。こうした表現に、節の植物を観察する目の確かさも感じられる。ツユクサの「夕さく花」は求めても得られないものの象徴であった。



節愛用の机と硯箱。
硯箱は引き出しのついた蒔絵のもの。
茨城県常総市石下の長塚節生家に保存されている。

我が病いえなばうれし癒えて去なばいづ
べの方にあが人を待たむ

癒えたなら、どこで恋する人を待とうか、という歌であるが、この歌は『万葉集』の「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いづべの方にわが恋ひ止まむ」(巻二・磐姫皇后)の韻律を生かしている。このように『万葉集』に学んだ声調が、自らの生命の危機を意識したとき、心のありようをなまなましく映し出す文体として力を発揮したのであった。植物への深い関心と、万葉調への傾倒。これが、節の晩年の歌を大きく飛躍させる双翼となるのである。

大正三(一九一四)年、「アララギ」七巻五号に、節は「鍼の如く 其の一」を発表する。「鍼の如く」は遺稿となった「其の六」まで続く、二百五十首に近い大作となった。節は、病中の記録と、季節感の豊かな歌を組み合わせることで、情感の深い表現世界を作りだしている。たとえば、

病院の生活も既に久しく成りける程に四月廿七日、夜
おそく手紙つきぬ、女の手なり

春雨にぬれてとどけば見すまじき手紙の
糊もはげて居にけり

という歌では、日記のような詞書と、淡々とした歌が組み合わされることで、小説の一節を読むような空間の広がりを感じられるのである。「土」などの小説を

書いたことで身についた技法だったのかもしれない。

さて、「鍼の如く」の冒頭は有名な、

秋海棠の画に

白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき
水くみにけり

という一首である。詞書にあるように、もともとは平福百穂の絵に書かれた画賛の歌であった。しかし、この一首だけ取り出しても、秋の冷涼な朝の空気が、しんと身に迫って感じられる。「霧ながら」は幾つか解釈があるが、「霧のなかで」「霧とともに」という感じであろう。「瓶こそよけれ霧ながら」という言葉の続け具合がじつに流麗である。

唐黍の花の梢にひとつづつ蜻蛉をとめて夕
さらにけり

病への不安はあるけれど、節はこのように水彩画のように透明な美しさのある歌を生み出していった。

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしとい
ねつたるみたれども

これも有名な歌で、かつては教科書にもよく取り上げられていた。結句の「たるみたれども」に、老いてうまく蚊帳を吊れない母への優しい眼差しが感じられる。ただ、この歌の背後には、病院生活がたらくて帰郷したという事実があった。この母を残して死ぬのことも



すげ笠に草履の旅姿。
明治39(1906)年、東北から越後、
佐渡へ旅したときのもの。

れないという哀しい思いが、一見さわやかな表現の裏側にはあったのかもしれない。

白銀の鍔打つとききりぎりす幾夜はへなば涼しかるらむ

畢生の名歌というべき一首である。きりぎりすの

鋭い鳴き声を「白銀の鍔」という視覚的な比喩で捉えているところに、表現の冴えがある。「幾夜はへなば」（幾夜が過ぎたら）の「は」という助詞の用い方にも特徴があり、深い嘆声のようなものが感じられる。

「鍔の如く」の中で、節は思うままに、意外性のある比喩表現を展開している。

口をもて霧吹くよりもこまかなる雨に薊の花はぬれけり

粥汁を袋に入れて糊とると絞るがごとく汗はにじめり

雨や汗を、節は変わった比喩を使って歌っている。比喩の部分が長いことも目につくだろう。特に二首目は、ぬるぬるとした粥の汁に自分の汗をたとえることで、病中の不快な身体感覚が伝わってくる。新しい比喩によって、これまで歌われてこなかったものを表現しようという意欲があったのであろう。節は最後まで、短歌の表現の領域を広げようとしていた。

節は大正三年六月に九州大学附属病院に入院。そして八月には、病の身体を押し宮崎への旅を企て

る。

霧島は馬の蹄にたててゆく埃のなかに遠そきにけり
酢をかけて咽喉こそばゆき芋殻の乏しき皿に箸つけにけり

知る人もなく、台風にも見舞われ、苦しい旅となった。結核患者であるために宿では冷たい扱いを受け、十分に食べる物が無い日もあったようである。結果的にはこの旅が、節の生命を縮めることになった。二首目はさりげない歌だが、咽喉の不調や食料事情の厳しさがうかがわれる。

節はこの旅の孤独の中で、結ばれなかった女性への思慕を噛みしめるようにして歌っている。失恋の悲しみを断つために、自らを傷めつけるような惨めな旅を続けねばならなかったのだろう。

むらぎもの心はもと遮莫をとめのことは
暫し語らず

病に苦しみつつ、心の中をよぎるのは「をとめ」、すなわち黒田てる子のおもかげであった。

一箇月の旅の後、節の病状はひどく悪化する。翌年の二月八日、節は福岡で死去した。三十七歳であった。



死の前年、大正3(1914)年、36歳の節。

（よしかわひろし）『塔』選者

長塚節作品抄 (二)

乗鞍はさやくく白し濁りたるなべてが空に只一つのみ「長塚節全集」明治四十四年

知らなくてありなむものを一夜ゆゑ心はいまは昨日にも似ず 明治四十五年

曳き入れて粟毛繫げどわかめまで櫟林はいろきけり 大正三年「鍼の如く 其の二」

しめやかに雨過ぎしかば市の灯はみながら涼し枇杷堆し

球磨川の浅瀬をのぼる藁船は燭奴の如き帆をみなあげて

おそろしき鏡の中のわが目などおもひうかぬ眠られぬ夜は「鍼の如く 其の二」

やはらかきくくり枕の蕎麦殻も耳にはきしむ身じろぐたびに

ひたすらに病癒えなどおもへども悲しきときは飯減りにけり

鬼灯を口にふくみて鳴らすごと蛙はなくも夏の浅夜を

車前草は畑のこみちに槍立てて雨のふる日は行きがてぬかも

単衣きてこころほがらかににけり夏は必ず我れ死なざらむ

ポプラーと夾竹桃とならびけり薨を越えてポプラーは高く「鍼の如く 其の三」

小夜ふけて竊に蚊帳にさす月を眠れる人は皆知らざらむ

水打てば青鬼灯の袋にも滴りぬらむ黄昏にけり「鍼の如く 其の四」

牛の乳をのみてほしたる壇ならで挿すものもなき撫子の花

さわやかに鳴くなる蛙たとふれば豆を戸板に転ばすがごと

暁の水にひたりて鳴く蛙涼しからんとおもひ汗拭く

こころよく汗の肌にならず吹けば蚊帳釣草の鬚殺ぎけり

松の木の疎らこぼるる暑き日に草皆硬く秋づきにけり

しらはにの瓶にさやけき水吸ひて桔梗の花は引き縮り見ゆ

抱かばやと没日のあけのゆゆしきに手圓ささげ立ちにけるかも

手を当てて心もとなき腋草に冷たき汗はにじみ居にけり「鍼の如く 其の五」

朝まだき涼しくわたる橋の上に霧島低く沈みたり見ゆ

瓜むくと幼き時ゆせしがごと豎さに割かば尚うまからむ

とこしへに慰もる人もあらなくに枕に潮のをらぶ夜は憂し

蝕みて鬼灯赤き草むらに朝は嗽ひの水すてにけり

此のころは浅蜷々々と呼ぶ声もすずしく朝の嗽ひせりけり

うなだれし秋海棠にふる雨はいたくはふらず只白くあれな

手を当てて鐘はたふとき冷たさに爪叩き聴く其のかそけきを

時雨来るけはひ遙かなり焚き棄てし落葉の灰はかたまりぬべし